

国際連合食糧農業機関(FAO)の統計によると、二〇〇九年に中国が消費した野菜は世界全体の消費の五〇%、豚肉は四八%、魚類は三五%、穀物は二〇%、果実が二〇%である。中国の人口は世界全体の二〇%であるから穀物と果実以外は異常な消費である。しかも、二〇年前の数字は、野菜は二九%、豚肉は三五%、魚類は二九%、果実は八%であったから、増加の傾向も異常である。

その主要な原因の第一は富裕階層の増加である。中国の一人あたり国内総生産額は五四〇<sup>ドル</sup>で世界の九〇番目であり、日本の一割強でしかないが、物価で調整すると日本の半分以上になる。そのような人々が「爆食」と表現されるように食糧を購入しはじめているのである。第二は中国特有の食事作法で、宴席で料理が不足することは恥辱であるとされるから、主催者側は参加人数以上の料理を用意することが通常である。

この旺盛な需要に対応し、昨年の中国共産党全国代表大会では「海洋權益確保、海洋強國建設」という目標が提起され、世界各地の漁場で乱獲が進展し、農業においても海外で農地の購入が急増している。この中国問題も食糧供給の課題であるが、二〇五〇年には九〇億人に到達し、二一〇〇年には一〇〇億人を突破する世界の人口増加は、現在すでに一〇億人以上になっている栄養不足人口の深刻な増大をもたらす。

国際連合は世界各国が特定の重要課題に関心を集中することを期待し、毎年、インターナショナル・イヤーを設定している。これまでも天文、物理、化学のような科学分野、森林、淡水、砂漠など環境分野、貧困撲滅、人種差別、奴隷制度など社会問題を対象としてきたが、今年はいんターナショナル・キヌア・イヤーという耳慣れない対象が選定されている。これは冒頭から紹介した食糧問題に関係する対象である。キヌアは南米アンデス山地の高地が原産の草本で、背丈二<sup>ミ</sup>ほどに成長し、その先端に生育する直径数<sup>ミ</sup>の種子を脱穀して食用にする。これは、寒冷地帯でも乾燥地帯でも貧弱な土壌の土地でも栽培でき、しかも蛋白質含有率や必須アミノ酸含有率が高率など、優秀な食品として注目され、一九九〇年代にはNASAが二一世紀の主要食糧になると推奨した経緯もある。最近では日本でも健康食品として販売されている。

もうひとつ注目されているのがキャッサバもしくはマンジヨカである。これも南米大陸原産の草本で、地中に生育する根塊を食用とする。面積あたりの澱粉生産能力は最高の部類で、乾燥地帯でも酸性土壌でも栽培可能なため、南米のみならず東南アジアやアフリカに普及し、二〇一〇年には世界で二億三〇〇万<sup>ト</sup>が生産され、食用澱粉作物としてはジャガイモの三億三〇〇万<sup>ト</sup>にはかなわないもの、世界二位になっている。

一九二〇年代、ソビエト連邦の植物学者ニコライ・ヴァヴィロフは世界を探査し、人類が食用としている植物の原産地域として一〇数カ所を特定したが、そのなかでも重要な地域がアンデス山地であった。世界三大穀物の一種であるトウモロコシ、芋類の生産一位のジャガイモと二位のキャッサバをはじめ、インゲンマメ、ビーナッツ、トマト、カボチャ、トウガラシ、パイナップルなど、数多くの作物がアンデス山地原産である。

一六世紀にインカ帝国を滅亡させたフランシスコ・ピサロは大量の金銀とジャガイモをヨーロッパにもたらした。金銀はスペイン王国を短期繁栄させただけであったが、ジャガイモは世界の飢餓を救済してきた。その恩恵にピサロは虐殺で返礼した。今後の食糧危機時代に期待される作物もアンデスの先住民が維持してきたものである。キヌア・イヤーの今年、世界は本当の返礼をすべきである。